

A-5

平成 29 年度東洋文庫ミュージアム特別展のアンケート調査

Questionnaire survey of special exhibition at Toyo Bunko Museum in 2017 fiscal year

梅孝治¹, 今西諒太², 兵藤花菜香³, 登川幸生⁴, 伊豆原月絵⁵
 Koji Toga¹, Ryouta Imanishi², Hanaka Hyodo³, Sachio Togawa⁴, Tsukie Izuhara⁵

This paper considers the results of the questionnaire that 60 groups cooperated in a special exhibition at Toyo Bunko Museum in 2017. The composition of the paper is the questionnaire method, the number of visitors and the age, the questionnaire result of each exhibition, the number of visitors by hour and the staying time. Finally, we summarize the relationship between the age of visitors and the evaluation of the exhibition and the relationship between the stay time and the evaluation of the exhibition from the perspective of experience and commentary. From the results of the questionnaire, it was found that the importance of choosing the design and exhibition method suitable for the target visitor and the hands-on exhibition gained high evaluation.

1. はじめに

2017年5月7日と6月4日の2日間、東京・駒込にある公益財団法人東洋文庫ミュージアムにおいて、学芸員課程の有志学生が特別展「遊んで学ぼう！地震の仕組み」を行った。来場者数は計279名であった。

東洋文庫ミュージアムは、東洋（アジア）の文庫資料を国宝5点、重要文化財7点を含む約100万点も収蔵する、図書館のミュージアムである。2017年4月19日から8月6日まで東洋文庫ミュージアムにおいて開催された企画展「ナマズが暴れた！？安政の大地震展 一大災害の過去・現在・未来」は、日本を中心に世界各地の大災害と復興の歩みを歴史資料から示していた。

本論文では、来場者に対して実施したアンケート調査および滞在時間調査の結果を分析し、来場者の特性や興味と展示との関係を考究した。

2. アンケート・滞在時間調査方法

5月7日は、受付でアンケート用紙をグループに1枚渡し、会場出口に記入場所を用意し、そこで回収した。アンケート用紙は受付で30分ごとに異なる印を付け、回収時に時刻を記入することで大まかな滞在時間を調査した。

6月4日は前回の方式のアンケートに加え、来場者の特徴と来場時間、退場時間をマルチタイマーで記録し、より正確な滞在時間を調査した。当日の来場者数は60組であった。

3. アンケート調査結果および考察

3.1 来場者数と年齢の関係

アンケート集計の結果、小学生は16人、20～30代は11人、40～50代は18人、60代以上は11人という結果になった。40～50代が最も多く、次いで小学生が多かった。

Table 1 Questionnaire

項目	選択肢
性別	男性・女性
年齢	小学生・中学生・高校生・大学生・20代・30代・40代・50代・60代以上
職業	学生・社会人・日本大学理工学部関係者（教員・卒業生・学生）
住まい	東京都・千葉県・埼玉県・その他
来場のきっかけ	ご来館した知ったため・展示内容に興味がある・学芸員課程に興味ある・日本大学に興味がある・その他
展示を知った理由	ポスター・東洋文庫ミュージアムのHP・日本大学のHP・理工学部学芸員課程のfacebook・新聞記事・その他
同伴者数	1人・2人・3人・4人・その他
同伴者との関係	1人・家族・友人・その他
各展示の評価	面白い・普通・つまらない

Fig.1には本特別展を何で知ったかというアンケートの集計結果を割合で示した。Fig.1より企画展示を知った理由で最も多いのは学校で配布されたチラシであり、次いで知人の紹介であった。本特別展の開催については、事前に近隣の小学校にチラシを配布し、周知に努めたため、多くの小学生が来場したと思われる。また、1回目の来場者の話を聞いて来場した家族、友人と誘い合わせて来場した家族が多かったため、知人の紹介という回答も多かったと思われる。来場者の構成と合わせてみると、学校で展示内容を知った小学生を持つ若い世代の家族が興味を持つ展示内容であったと思われる。

1：日大理工・学部・航宇 2：日大理工・学部・物理 3：日大理工・学部・電気 4：日大理工・教員・海建 5：日大理工・教員・一般

3. 2 展示の評価

展示ごとの評価を集計した結果を Table.2 に示す. 液化化実験が最も高い評価で次いで P 波 S 波の可視化実験が高い評価であることが分かる. 全体を通して, 60%以上の方が面白いという評価であった.

Table.3 に展示が面白いと回答した結果を年代別に集計した. スライムの評価では小学生が 88%と最も高く, 世代別に見ると 40~50 代は平均で 90% , 60 代以上も 64%以上と全体的に高い評価であった.

液化化実験と P 波 S 波では, 両者ともに中高生を対象とした展示企画であったために, 小学生や高齢者の評価はあまり高くないと思われたが, 全世代から高評価を得ることができた. これは, 体験の要素が多かったためと考える. スライムは小学生と未就学児を対象とした楽しめる参加型展示として企画されたものであり, 小学生から最も面白い展示と評価を受けた. 展示ごとの対象者から企画どおりの高評価を得ていたこと, それらの組合せによりすべての展示で高評価を得ていたことを確認でき, 正しいターゲティングができたと思われる.

3. 3 時間別評価

Fig.2 は 15 分ごとの展示室内の来場者組数を表している. Fig.2 より 11:15 と 13:15 と 14:30 が最も多く, 12:30 が最も少ないことが分かる. Fig.3 は 10 分ごとの来場者の滞在時間の割合を示している. Fig.3 より 20 分以下の滞在時間の割合は 15%未満であることが分かる.

触って体験する実験が多かったので滞在時間が長く, また, 滞在時間と展示の評価を比較すると滞在時間が長いほど満足度が高かった¹⁾. また, 今回の滞在時間調査は調査員が目視により滞在時間を計っており, 特別な装置等を利用しなくても滞在時間の計測が可能であることを確認できた.

4. まとめ

展示内容と対象者, 展示方法などを適切に組み合わせることにより, すべての年齢層に満足してもらえる特別展となったことを確認した. また体験の要素が重要であり, 加えて解説をすることでより評価が上がり, 全世代のから高い評価を得ることができる.

今回試みた来場時間と滞在時間の計測を展示ごとに拡張することにより, 展示の空間配置や人員の配置に活用することができることを確認した.

5. 参考文献

[1] 李重樺, 金大雄, 富松潔, 赤司善彦, 展示施設等における来館者行動評価システムの開発と評価 -九州国立博物館における赤外線センサーを用いた来館者の行動ログデータ取得システムの開発-, デザイン学研究, Vol.55 No.4, P. 77-86, 2008 年 5 月

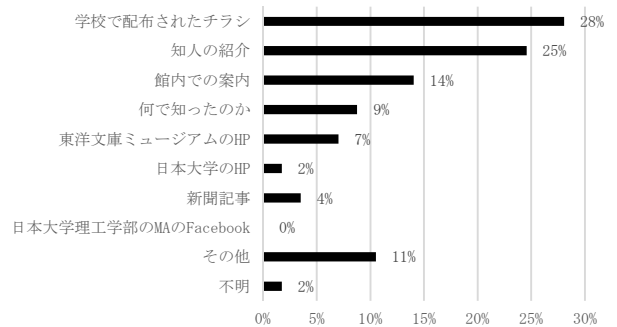


Figure 1 Reason for visiting (2nd day)

Table 2 Evaluation of each exhibition

	面白い	普通	つまらない	評価無し
液化化	89%	7%	0%	4%
P 波 S 波	88%	8%	2%	2%
プレート	63%	25%	2%	10%
スライム	63%	21%	0%	15%

Table 3 Excellent evaluation by generation

	小学生	20~30 代	40~50 代	60 代以上
液化化	94%	91%	100%	82%
P 波 S 波	81%	73%	94%	91%
プレート	63%	55%	94%	55%
スライム	88%	64%	72%	27%

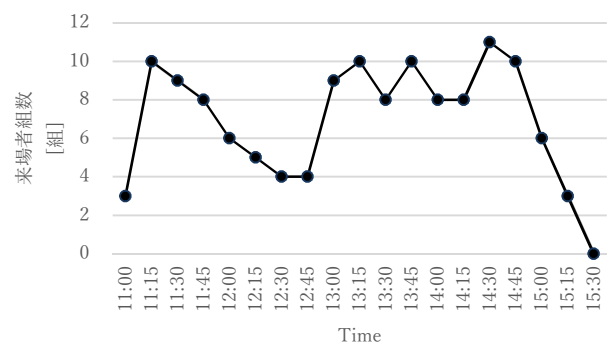


Figure 2 The number of visitors by hour

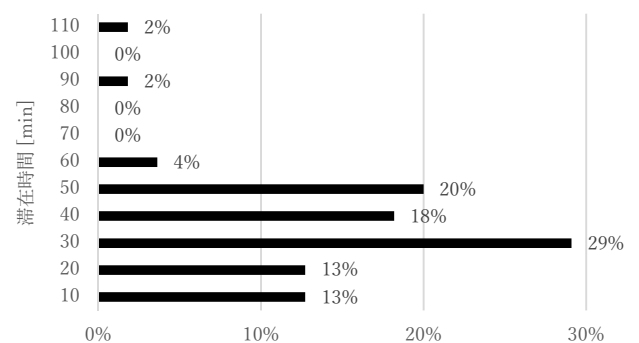


Figure 3 Percentage of staying time of visitors